

<b>Title</b>	大人であること、子供であること
<b>Author(s)</b>	片柳, 榮一
<b>Citation</b>	キリスト教と諸学 : 論集, Volume27, 2012.3 : 7-29
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3912">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3912</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

## 大人であること、子供であること

片 柳 榮 一

イエスに触れていただくために、人々が子供たちを連れて来た。弟子たちはこの人々を叱った。しかし、イエスはこれを見て憤り、弟子たちに言われた。「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。はつきり言っておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。」そして、子供たちを抱き上げ、手を置いて祝福された。

（新共同訳、マルコによる福音書一〇章一三―一六節）

今日は「大人であること、子供であること」と題して、少し考えてみたいと思います。ここにお集まりの皆さんの中には、大人になって長い時間のたっておられる方、あるいは私のように、大人であることも終わりに近づいている方も、おられるようですが、大部分は、ちょうど成人式を迎えた頃の方々でしょうか。一人前の大人として迎えられたいという気持ちと、大人にはなりたくないという気持ちが、奇妙に入り混じっている年齢ではないでしょ

うか。自分を振り返っても、この時期は何か不安で苦しく、最も長く、内容も濃いものであったように思います。甘えた呑気な自分から脱したい、いろいろな意味で、親から自立したいと思つて、自分に辛くあたっていたように思います。

私たちが育つた頃とは比較にならないほど豊かな、現在の社会の中で、大人であるということは、独特の難しさを持つているように思えます。子供のように受け身で甘えた気分でいても、一応豊かに与えられるからです。

ここではまず、大人であるということ、あるいは大人になるということの目立つた特徴から考えてみたいと思います。

## 大人であること

### 自己の責任を引き受けるということ

よく言われますように、大人であるということは、基本的なことを他人に頼らず、自分で自分のことはできると、自分のうちにいわば、中心を持つ、はじまりを持つことであると言えましょう。大人であることのわかりやすい一つの特徴は、自分のしたことを、他人の所為（せい）（為す所）にしないで、自分で責任を持つということであると思います。これは簡単なようで、最も難しいことです。そのことは皆さんも胸に手を当ててみれば、うなずかれることと思います。

我々はある意味で残酷なほど、この点では責任意識を刷り込まれています。たとえば自動車事故を起こして、大きな怪我をしたという場合、運転していた人が酒を飲んでいたとしたら、それはその人が悪いので、いわば自業自

得だということで、納得します。病気になっても、その人が不養生で、暴飲暴食をしていたと聞けば、それではしょうがないと納得します。我々はいつのまにか、厳格な道德家になっています。自分に起こったら、そう簡単に原因の不道德性と結果の甚大さの関係に納得できませんが、他人の場合は思った以上に我々は冷たく突き放します。無理にでも納得しようとさえします。逆に言えば、その意味で、自分のせい（所為）と決まることには恐怖感さえ持っています。皆から同情されず、いわば、見捨てられるからです。

この「お前のせいだ」、「自分のせいだ」ということは、ある行為が自分によって引き起こされた、自分が選んでそれをしたのだ、ということですから。確かに生きてゆく中では節目節目に、自分がそういう選びの場に立たされます。皆さんの場合で言えば、大学を選ぶということが、大きな選びの最初の経験であつたかもしれません。これからも就職、結婚などで、どのように、何を、誰を選ぶかということ突き付けられます。その選択がうまく行く場合はあまり目立たないのですが、うまく行かない場合、どうしてこんな選択をしたのか、と自分に問わざるをえません。ここで我々はいついつい、この選択をサジェストしてくれた、親や知り合いの人に非難を向けがちです。親が勧めたから、あの人が紹介してくれたから、とか、お節介に口を出さず、ほっとしてくれたらこんな選択はしなかったのに、などと愚痴を言ってしまうのです。

しかしこのように甘えることが許されず、突き放されて、一人にされることに耐えることが、大人であることの最初の、大事な要件であるように思います。私も六十年以上生きてきて、ますますはつきりと思うことは、「人間誰もが、この自分だけで引き受けねばならない場を生きている」ということです。人生を生きるということとはそういうことです。そのことを知っているということが、一人前の大人であることだと思えます。決して、夢を捨てて、その場の損得勘定がうまく、打算的になることが大人であることではないのです。

人のせいにはしない、自分の為すことは自分がしたこととして自分で引き受ける、ということをし少し難しい言葉で言う、「自己責任」ということです。最近よくこの言葉が使われます。主に経済の用語として聞くことがあります。ハイリスク・ハイリターンの投資は、そのリスクを前もって十分知ったうえで、自己責任でしなければならない、などとよく言われます。

この言葉が印象深く使われたのは、皆さんも覚えているかどうか知りませんが、五、六年前にイラクで日本人が人質になった時でした。はじめみな心配しましたが、途中から、戦争が為されている地域に民間人が出かけて行ったという、この危険な、冒険とみなされた行為に、猛烈なバッシング、非難、中傷が起きました。外務省まで、自己責任などと、いわば非難しました。つまり、国は責任を負わない、自分勝手にしろと突き放し、いわば見捨てたのです。ここでの自己責任とは、日本語で、自己責任と同じことを意味する「自業自得」ということです。こんな冒険をする勝手な人間は、自分で始末をつけろということであり、間接的な脅しであり、そんなことすると警告したのです。

それに対してイラク戦争の渦中にあつたアメリカのパウエルという国務長官（日本の外務大臣）が、「彼らを非難すべきではない。このような人々がいないなら、世界は新しく変わらないのだ」と言いました。これは本当に、自己責任ということのわかった人、そしてチェンジ、つまり世界を変えろということの意味のわかった人の言葉だと思いました。このように自ら冒険を自己の責任で引き受ける人々によって世界は前進する、変化するのです。外務省の自己責任というのは、実は、自業自得という意味でしかなく、危険なことはするな、やめておけ、みんなと同じことをしていればいいんだ、そうでないと助けてやらないぞ、という脅しなのです。そして我々は、自己責

任という、いささかかったいい、いわばぎざな言葉は使いますが、自業自得という、本音では、やめておけという脅しの意味でしか、使っていないのではないかということであらためて思いました。その意味では日本の社会は、本音では、人々が大人となることを阻止している面があるように思えます。

### 他人の自立性を認める

そのことはひとまずおくとしても、この自分がひとり決めて生きていかねばならない場、どれだけ多くの人と一緒に共同で生きていても、あなた自身はどう考えるのか、と自分の最終の決定が問われる場合は、眼に見えるどのような身体の部分でもありません。眼に見えない、他人には隠された心の場で、私たちの深い決心はなされます。皆さんも自分を振り返って考えてください。自分はこれを選ぶという決心は、いろいろな理由で選ばれたものでしょう。本当には自分が選んだと言えないこともあるかもしれません。親に勧められたからという場合でも、最終的には、それでよい、と自分がゴーサインを出したのです。そしてどんなに投げやりな決定でも、自分が最後に、それでいいと認めたことは事実であり、それは、他人の眼に見えない、自分だけの場で為されたことなのです。私たちが生きるということは、こうした自分の決定の連続です。ほとんどは他人が決めたことを承認することだとしても、最後のところで、自分が首を縦に振って頷いているのです。ある意味で辛いことですが、周りを見回して、相づちを求めても、誰も最後のところでは消えているのです。

そして大人であるということは、自分がそのように最終的に自分で自分を引き受けねばならない、ある意味で孤独な場に立っていることを自覚することです。しかしそれだけでなく、自分と同じように、私の周りにいる、自分の親兄弟、友人、隣人の一人一人がこのような自分の場を持って自立しているのだということを認めることこそ、

大人であるということだと思います。このことは易しいことのように、私たちはなかなかそのようには他人の自立性を認めることができません。一人一人は決して、自分の周りにある物のように、自分のために利用してしまうことのできないものであることに気づきません。いろいろ失敗と迷惑をかけながら、ある意味で高い代価、つけを払って、このことを知ってゆくのです。我々が成長するというのは、まさにこのことを少しずつ悟ることです。

このようなことを、アフリカの聖者と言われた、シュヴァイツァーは、印象深く述べています。シュヴァイツァーは選ぶ、決意するということに焦点をあてず、個人というものの特性として語っていますが、その個人というものの核心にあるのは、自ら決める人格性であることを彼はよく知っています。

「一般に、ひととひととの関係には、わたくしたちがふつう承認する以上に大きな神秘が存在するのではないのでしょうか？ だれでもわたくしたちは他人をほんとうに知っていると、たとい数年このかた毎日いっしょに生活していても、いうことは許されないであります。わたくしたちはもつとも親しい友人に対してさえ、わたくしたちの内なる経験のすべてのうち、わずかな断片を分け与えることができるにすぎません。わたくしたちは自分をすっかりさらけ出すことはできないのです、たといそれをつかむことができるとしても。わたくしたちは他人の顔かたちを十分に見分けることができないいう闇のなかをならんで歩いているのです。たどきどきわたくしたちが、道づれとともにする体験、あるいはわたくしたちのあいだにかわされることばによつて、かれは一瞬いなすまに照らしだされたようにわたくしたちのかたわらにたつのであります。そのときわたくしたちはかれがどんなひとであるかを知るのであります。わたくしたちはそれからまた、おそらく長い

あいだ闇のなかをならんでいきますが、もう一度他人の顔かたちを思いうかべようとしましてもはやむだであります。

こういうふうになたたくしたちはたがいに神秘であります。この事実はすなおに認めなければなりません。たがいに知りあうということは、たがいにすべてを知っているということではなく、たがいに愛と信頼とをもつて、たがいに信じあうということではなりません。……また魂はとりのけることのできないおおいをもっているのです。わたくしたちはこんなに親しいあいだであるから、わたくしは君のあらゆる思いを知る権利があるということはだれ一人許されません。母親でさえわが子にこういう態度にすることは許されないのです。すべてこの種の要求は愚かなことで有害であります。ここでは与えることだけが必要なではありません。与えることはひとの目を覚ますのであります。君の精神的本質からできるだけ多くを、君と歩みをとりにしているひとびとに分け与えなさい、そしてかれらから君にかえってくるものを高価なたまもの〔贈り物〕として受けとりなさい」（シュヴァイツェル『わが幼少年時代』、波木居斉二訳、新教出版社、一九六一年、七五―七六頁。「」内は筆者の補語、以下同様）。

今日プライバシーということがよく言われ、ある場合には自分に都合の悪いことを単に隠すための隠れ蓑としてこの言葉が使われがちですが、このシュヴァイツァーの言葉はプライバシーの本質が何であるかをよく示しています。シュヴァイツァーは言っています。

「ひととは他人の本質のなかに押しこめていこうとしてはなりません。他人を分析することは——精神錯乱者



をふたたび正常にもどすためでなければ——下品なしわざであります。ただに肉体的なはずかしさばかりでなく精神的なはずかしさがありますので、わたくしたちはそれを尊重しなければなりません」(同、七六頁)。

この尊重がプライバシーの核心です。私たちは、どんなに親しくても、友人、隣人のほんの一部しか知りえない、闇に包まれた部分を何か簡単にわかるかのように、土足で踏み込んで、したり顔で、彼の心の動きはこうだなどと、心理分析をしてはならない、と言うのです。

### 人類全体の成人化

シュヴァイツァーは、我々は、他者に関しては、知りえないから、押しいつてはならない、と言います。しかしそれだけでなく、この一人一人の場所は、まさに自分が、他人から左右されないように、自由に空けておかなければならぬ場所でもあります。他人から庇護されるというのは、単に隠されるという消極的な意味ではなく、一人一人が、自分で決心する場所として、自由に空けておかなければならないという積極的な意味があります。プライバシーだけの問題ではありません。自分の場を自分だけの場所として持つ、というのは、自分がそうしたい、という感情や願いを持つ、というだけのことでありません。近代という時代は、社会がこのような個人が一人で自分で決める選択と決断の場所を認め、それを積極的に推し進めようとしているのです。

この近代の深い意味を教えてくれる人に、A・D・リンゼイというイギリスの思想家、政治哲学者がいます。聖学院大学では、大学出版会で、このA・D・リンゼイの思想を日本に紹介しようとして、いくつもの著作を翻訳しています。私も非常に多くを教えられています。リンゼイは、古代と近代では、国家とその法律に関して根本的な

違いがあると言います。古代ギリシア、ローマ世界では、国家は自分の任務を、人々に善い在り方を教えることであると考えていたと言います。これに対して近代では、国家の役割は、一人一人が自分で自分のことを決めることができるように、手助けをすることにあることを次第に自覚してきたと言います。もちろん単純にみな近代国家がそうだったというわけではありません。つい最近、あるいは今も、強大な全体主義国家がありますが、民主主義が目指す基本的な傾向は、個人の自立を国家が支援することだと言います。

「国家の道徳性に対する関係の古典的概念は今や、最終的に放棄された。それは人々が道徳性をより低い観点から考えたからではなく、より高い観点から考えたからである。古代社会は、哲学者たちによって考えだされた行為の理想を認めさせることを国家の機能と考えていた。だからアリストテレスは「倫理学」において善き生活を説明した後「政治学」で、この善き生活は如何にして、都市国家の社会的機構によって具体化されるかを論じる方向に向かうのである。アリストテレスによればもちろん通常、国家は市民の多数派が考える善を促進するものである。様々な国家において、善き生活についての不完全な多くの概念と、従って異なった法とが存在する。……しかし哲学者が王であり、自らの考えた完璧な善き生活をその立法によってもたらす完全な国家においては、法と善とは同じ内容を持つことになる。

国家の道徳性に対する関係の新たな概念は、まったく違ったものである。それは、強制的な善とは——善の真の意味で——言葉の矛盾であると考ええる。だから善き生活はその適切な形態において、自由を必要とし、自由な仲間関係（free fellowship）の中でだけ生きられうるのであると考ええる。だから国家の強制の機能は直接に、人を道徳的にすることではなく、そのうちで道徳的自由が場と安定をもつ枠組みを提供することがその機能な

のである。社会の中で最も価値あるものは、自由である。このものは、外的な標準化に馴染みえない。そうしたものは成長し、進展するものである。その背後に強制を伴った国家の規則は、秩序と安全のために必要な社会的行動の最小の標準を表現するにすぎないのであり、成長と進展に場所を与えるのに必要な社会的行動の最小の標準である」(A.D. Lindsay, *The modern democratic state*, Oxford 1962, p.87. 参照邦訳『現代民主主義国家』、紀藤信義訳、未来社、一九六九年、一二〇—一二二頁。強調は筆者による)。

リンゼイは驚くべきことを言っています。近代という時代の本質的な特徴は、最初に申しましたように、私たち一人一人が、自分で自分のことを決めてゆくように、社会と国家そのものが配慮していることであり、国家の持っている力の役割は、こうした個人の自立を阻害するものを阻止することにあると仰うのです。決して、単に科学技術が進歩して、人々が快適な暮らしをすることができるようになったということにあるのではないのです。もちろん現実の国家がそうなっていると考えるのはおめでたいでしょう。国家はもつとえばつなく、自分の力を濫用しています。私たちは、最良の正義の力と思った検察が、力を勝手に使っていたのを目のあたりにしています。しかし方向は示されているのです。国家の力が何に向けて使われねばならないか、それは個人の自立を支援保護し、それを邪魔しようとするものを排除するためであるということを示されているのです。近代という時代は、そのような意味で、一人一人、自分のことは自分で決める自立の力を持つという意味で、人類が大人となる時代であるということが出来るのです。そしてその意味で、私たちが少しでも、自分で自分のことを決めて、ひとのせいにはしないことができるにに応じて、私たちは、人類全体の成人化に参与しているのです。

そして人類の歴史、近代の自立性の歩みを、決定的な事柄として受け止めようという考えは、キリスト教の中でも、深く受け止められようとしています。このことに關しては、これだけを十分時間を取り、踏み込んで話さねばならないのですが、時間がありませんので、少し唐突のようですが、ボンヘッファーという、ナチスに抵抗し、ヒトラー殺害計画にも關係して死刑に処せられた人が、獄中で記した言葉を引用しておきたいと思います。

「四四年七月一六日

たとえ神が存在しないとしても、我々はこの世を生きてゆかねばならないということを認識することなしには、我々は誠実ではありえない。そしてこのことを神の前で認識するのだ。神ご自身が我々をこの認識へと追い立てるのだ。我々が成人したことによって我々は神の前での我々の位置についての真実の認識へと導かれる。神無しの生を生きるに足る者として生きねばならないことを神が我々に教えるのである。我々と共なる神は、我々を離れ去る神（マルコ一五・三四『我が神、我が神、どうして私をお見捨てになったのですか』）である。我々をこの世で、神という作業仮説なしに生きさせられる神は、我々がその前に常に立つ神である。神の前で、神と共に、我々は神なしに生きるのである。神は自らを世から十字架へと追いやりたもう。神はこの世では無力で弱い、そしてまさにそのようにして、そのようにしてだけ神は我々のもとにあり、我々を助けられる。マタイ八・一七「これは預言者イザヤによつて「彼は、私たちのわずらいを身に受け、私たちの病を負うた」と言われた言葉が成就するためである」から明らかなのは、キリストが助けられるのは、その全能の力によつてではなく、その弱さと苦しみによつてであるということである。

ここにすべての宗教との決定的な相違がある。人間の宗教性は、人間が窮境にある時、この世での神の力に

眼を向けさせる。神は機械仕掛けの神である。聖書は人間をして、神の無力と苦難とに眼を向けさせる。ただ苦難を受ける神だけが助けうる。そのかぎりでは、誤った神観念が、それでもつて払拭される世界の成人性への先に述べた発展は、聖書の神への眼を開かせる。この神はこの世での自らの無力さによって力と場とを得るのである。「この世的解釈」は「この世から始めねばならぬ」(D. Bonhoeffer, *Widerstand und Ergebung*, Gütersloh 1951, S.192f. 参照邦訳『抵抗と信従』、ボンヘッファー選集Ⅴ、倉松功・森平太訳、新教出版社、一九六四年、二五三頁。強調は筆者による)。

彼は、人間が自分の責任を自覚し、自分の足でしっかりと立つ、私が拙く話してきたようなことを、人類の全体、世界全体が成人してゆくこととして深く肯定しています。彼は「我々をこの世で、神という作業仮説なしに生きさせられる神は、我々がその前に常に立つ神である。神の前で、神と共に、我々は神なしに生きるのである」とまで言います。苦しい時の神頼みと言われるような、自分の力でできないことを力ある神に頼むという宗教的姿勢を、まだ人間が子供であつた時の心の姿勢だと言います。「人間の宗教性は、人間が窮境にある時、この世での神の力に眼を向けさせる。神は機械仕掛けの神である」。彼は一二、三世紀から始まった近代化の歴史の歩みを、世界が成人してゆく歩みとして深く肯定します。「我々が成人したことによって我々は神の前での我々の位置についての真実の認識へと導かれる。神無しの生を生きるに足る者として生きねばならないことを神が我々に教えるのである」。神無しの生を生きるとは、ボンヘッファーが死を前にして絶望的になり、神も仏もないと感じたということではまったくありません。そうではなく、苦しい時の神頼みというような、自分の力無さを、神に代わってもらおうとする態度は子供のものであり、そのような魔法使いのような神なしで生きることを彼は積極的に肯定します。

先の言葉でいえば、私が一人立たされた場を自分の最終責任において、自分一人で引き受けるということです。自分で引き受けるという場合、文字通り自分一人で引き受けるのであって、神もここには並んでいないのです。この近代の自立の歩みを、彼は、人類が成人し、大人になってゆく過程であると捉えています。私も学生の頃これを読んで、このように近代を人類が大人になってゆく歩みとして捉える考えに深い感銘を覚えました。

しかし、「神なしに」ということを「神の前で生きる」という謎めいた言葉は謎のまま残りました。神なしにやってゆこう、という姿勢はよくわかりました。しかしその全体をなお、「神の前で」ということは謎のままでした。確かに私たちの周りは、神などいない、神なしで生きる、そのような生き方で充ちています。何故なおボンヘッファーは「神の前で」と言うのかは大きな問いでした。この私の話においても、ひとまずこの問いは問いのままにしておきたいと思います。

## 子供であること

### 大人の現実の姿

ここまでは話の前半で、「大人であること」ということで何を私が考えているかをお話ししました。大人であることは、自分の為したことを人のせいにはしない、少し難しい言葉で言えば、自由な主体として自らを自覚し、他者にもその自由を認めた自発的な共同体を創ってゆくことであり、そのことが、近代という時代の歴史的使命であること、そこに宗教としての使命もあることをお話ししました。話はここで終わりでもいいのです。しかし題には、続けて「子供であること」とあります。大人であることの前に、子供であることの話がされるのなら、わかります

が、「大人であること」の後に続く「子供であること」とは何なのでしょう。

大人であるべき課題をこれまでお話ししたのですが、私たちが自らの周りに、また自らのうちに経験し眼にする現実、大人の姿は、少し違った様相を呈しています。もつと違った、いわば歪んだ大人の姿が目につきます。若者が大人になることに抵抗を感じる中には、もつともな点があります。このことを先ほど引用したシュヴァイツァーは同じ本の最後のところで印象深く述べています。

シュヴァイツァーも、通常の意味での大人、彼のいう「円熟した人」に対しては厳しい見方をしています。

「ひとの本質と生命とを決定する思想は神秘的な方法によって与えられるのであります。それは幼年時代の終わるころひとのうちに芽生えはじめるのであります。真理と善に対する少年のときの感激がかれのたましいに起こるとき、それは花を開き実を結ぶのであります。その後わたくしたちがたどる発展において、春に結んだ実がわたくしたちの生命の木にどれほど多くついているかがじつをいえば大切なのであります。

わたくしたちは生涯のあいだいつまでも少年時代と同じように考えたり感じたりするように努力しなければならぬという確信が、忠実な助言者のように、わたくしのいく道についてまわりました。本能的にわたくしはいわゆる「円熟したひと」にならないようにいつも気をつけました。

ひとに対して用いられる「円熟」という言葉はわたくしにとっていつもなにか不気味なものでありましたが、いまもそうであります。わたくしはそれから貧弱・萎縮・衰耗といったことが不協和音のようにひびいているのが聞かれるのです。ふつうわたくしたちがあつたを見て、円熟しているというのは、あきらめの分別ができていふことでもあります。ひとは少年時代に高価であつた思想と確信とをすこしずつ放棄して、たが

いにならないあつて円熟さを獲得しています。かれは真理の勝利を信じていましたが、いまはそうではありません。かれはひとを信じていましたが、いまはそうではありません。かれは善を信じていましたが、いまはそうではありません。かれはかつて正義の熱心な味方でありましたが、いまはそうではありません。かれはかつて親切と寛容の力とを信じていましたが、いまはそうではありません。かれはかつて感激することができましたが、いまはそうではありません。かれは人生の暗礁と嵐のなかをたくみに舟をあやつるため、かれの乗っているボートを軽くしました。かれはなくてもすむと思われる荷物を投げすてました。しかしかれがとりのけたのは食糧と飲み水であつたのです。いまかれはまえよりかるがると舟をすすめています。しかしかれは弱りはてているのであります」(『わが幼少年時代』、八〇—八二頁)。

ここで述べられた弱り果てた大人が、残念ながら、確かに我々の周囲に、また自分のうちに、目にする大人です。様々な経験を積み、その意味では豊かになつたはずなのに、シュヴァイツァーは、弱り果てていると言います。彼がいわゆる円熟した人に欠けていると見るのは、本当の食物と水です。それが単に子供の頃のいわゆる「純粋な理想」であるなら、困難にあつて、なくてはすむものとして、投げ棄てて構わないでしょう。しかしシュヴァイツァーは、それなしには生きられない食糧と水だと言っています。食糧や水は、いつも補給しなければならない、自分には元来ないものです。シュヴァイツァーはそれは単に肉体の糧だけではなく、魂と心においても、人は自分にはなく、絶えず補給しなければならない、食糧と水というものがあると言います。善や正義、親切や寛容は、彼によれば、我々がいつも外から補給しなければならない、我々はそのような糧を必要とする存在であると言います。我々はいつのまにか、そのようなものを必要とする弱い存在ではなく、そんなものは必要としない強い存在であるかのよ



うに錯覚してしまっていますが、そのためにむしろ我々は、疲労し、弱り切っていると言えます。

今のは大人の頹落した姿を示したのですが、もう一つの文章を紹介します。学生時代によく読んだ、リルケというチエコのドイツ語を用いた作家の『マルテの手記』という本の中の一節です。マルテという主人公の子供時代の思い出の一つです。最近火事で母屋を焼失した、隣近所の伯爵家を父母と一緒に訪ねたときのエピソードです。

「二度火事に会ってから、シューリン家の人々は物の焦げる匂いに対して一種独特な反応を持っていた。狭い、暖めすぎた部屋の中はしょっちゅう何かの匂いがした。すると、それを確かめて、みんながめいめい意見をのべるのだ。ツォエは煖炉を調べていた。实际的に、良心的に、ことごとついていた。伯爵はそこらじゅうを歩きまわって、部屋の隅に立ち止り、しばらくじっと待っている。そして「ここではないようだ」と言った。伯爵夫人も立ち上がったが、どうしたらよいかわからなかった。父は自分の後ろに匂いがあるとでも思ったのか、ゆっくり体をねじむけた。とっさに侯爵夫人は嫌な匂いをするのだと決めてしまい、ハンカチで鼻を押えた。一人一人の顔つきをうかがいながら一応おさまるのを待つつもりだった。ウエラは「ここだわ、ここだわ」と、匂いを突きとめたように、ときどき叫んだ。その言葉のたびに、一瞬、不思議な静けさが支配した。いつのまにか僕もいつしよになつて一所懸命に嗅いでいた。と急に（部屋の暖かさのせいか、近くに並べたたくさんの明りのせいかわからぬけれども）僕は生れて初めて、幽霊が怖いという恐れを覚えた。今はつきり僕の目に映っている大人たちが、さっきまでなんの屈託もなく話したり笑ったりしていたのに、身をかがめて部屋じゅうを歩きまわり、何か目に見えぬものを捜している。みんなが誰にも見えぬ何かを予感している。

それが僕の心にはつきり刻まれた。何かわからぬものが大勢の大人たちよりも強いのだということが、僕には非常に恐ろしかった」（リルケ『マルテの手記』大山定一訳、新潮文庫、二〇〇一年、一七五—一七六頁）。

何でもない光景のようですが、非常に印象的なのは、最後のところです。幼いマルテにはそれまで大人は、何の怖いものもなく、安定して頼りがいのある大木のように思っていたのでしょう。ところがここで見た大人たちは、見えない火元を探して、おろおろしている頼りない人々でした。何かわからぬ強いものの前でうろたえている、弱い、いわば子供と変わらぬ姿でした。マルテにとって、大木のように頼れる動揺することのない大人というイメージが崩壊した出来事でした。

ここでは先のシュヴァイツァーが語っているような単に大人の頹落形態というより、どのような立派な大人であろうとも、免れない現実の姿が示されているように思います。こういう経験を我々も様々な形で味わいます。そういうことが、ある意味で大人になるといえることも言えます。確かに大人は様々な経験と知識を豊富に持っています。しかしつくづく感じるのですが、時間の中、歴史の中を生きるということは、本質的に、これまでになかった新しいことに晒<sup>さら</sup>されて生きることなのです。そこではこれまでの体験は大きな参考になるとしても、現実は何時も我々の知識、体験を超え出ているのです。『マルテの手記』に描かれた、見えない物の前でおろおろしている大人、というイメージは、人間の根本の姿であるように思います。ある意味ではこのおろおろした自分を本当に認め、見据えることができるのが、大人になるということとも言えるように思えます。大人の戦列に加わるというのは、大人がそれほど強く、頼れるものでなく、自分も微力ながら、共に担いあうという決意を持つことも言えると思います。

## 大人と子供の関係

常識的な大人と子供の関係を崩される一つの思い出があります。

もう三十年ほど前、私たちの家庭に、子供が生まれて半年がたった頃のことです。子供の世話ほとんど家内にまかせつきりだったのですが、お風呂にいれるのだけは、私が受け持っていました。子供を洗って、家内に渡して、外ですぐに拭いてもらうので、二人がかりにならざるをえないのです。その日も子供を湯につからせて、バレーボールを少し大きくしたくらいの子供を二つの手で支えていました。今、手をはなしたなら、たちまち沈んでしまうのだと、自分が子供に対して絶対優位の立ち場にあるということを、あらためて思いながら、湯舟につかっていた。そしてふと子供の顔を見ました。正確には子供の眼を見ました。子供の眼は澄んでいると言われますが、そのせいであったのか、その眼を見ていて、この眼は自分と対等だと思いました。身体や顔は、これからどんどん成長し、変わってゆくのだろうけれど、この眼は、すでに自分と等しいものであり、自分はこの眼でこれから先ずつと見つめられるのであり、私が死ぬ時もこの眼で見つめられるのであり、この子が死ぬまでこの眼は変わらないのだらうと思いました。

それは単に私の思い過ごしだと反論されるかもしれませんが。子供は何も考えておらず、その意味では動物の眼も同じではないかと異論を差しはさまれるかもしれません。しかしやはり動物の眼とは違うように思われます。私の家にもネコがおりました。これを夜、家の外に出すのが私の係りでした。ネコを抱いて、よく眼を見るのですが、非常に明確な造りをしていますが、ある空虚な明瞭さ、輪郭であることがわかります。それは形としては人間の眼とあまり変わらないのですが、やはり根本的に違うように思われます。子供に感じた対等という感じはありま

せん。ネコを家の外に出すと、とたんにひどく緊張して、鋭く敵がいなかを観察します。その眼はらんと輝いており、その限りで、張り詰めたネコの心を映し出しており、その気持ちは理解できません。しかし野生の戦いの緊張はその代償を持っています。そこには人間の眼の優しさとも言えるものはありません。子供にその時感じた対等であるという感覚は、この野生の戦いを免除された優しさから来ているのかもしれませんが。

これは言語学でよく言われることですが、子供は短期間に見る間に言葉を修得しますが、それができるのは、ある意味で言語の基本構造をすでに持っているからだということです。そこからチョムスキーという言語学者は、個別言語の多様性の前に、人間の言語の基本構造は同一であるという考えを展開していますが、ある意味で、子供はほとんどのものを持って生まれてくるのではないかと思います。個別的なことはいちいちの経験の中で修得してゆくのですが、基本的な枠組み、構造とでも呼ばれるもの、あるいはあるものに対してどのように反応し、感じるかという全体としての心とも言うべきものは、すでに持っているのだと思います。そうしたものを子供の眼に私は感じたのだろと思うます。その時から私は、子供の訳のわからない行動や、いたずらや乱暴の背後にいつも、ある澄んだ、対等の眼とも言えるものを思うようになりました。

### 弱さと依存性の自覚

しかし、子供がこの我々と対等ということは、よく考えてみると、子供がすでに大人と等しいということではないように思われます。幼子も潜在的にはすでに大人なのだから、我々と対等なのだということではないように思われます。ここで考えたいのは、対等であるというその基準は、大人であるということではないかということですか。つまりむしろ、我々大人も、根本において、幼子と同じであるということがあってはならないかというこ

とです。

先ほど読んでいただいた聖書の箇所（マルコ一〇・一三―一六）で主イエスは、子供の在り方を天国に入る条件とさえしています。主イエスは神に対して、「アバ、父よ」と呼びかけています。この主イエスの態度の革命的新しいさについてはよく言われます。主イエスの子供に対する姿勢の根本には、人間は、永遠の神の前で、いつも子供であり、「アバ、父よ」と呼びかけるのが人間の最終の在り方であるという自覚があるように思われます。確かに現在の日本社会の根本の問題の一つは、大人自身が真に成熟していない、あまりに子供っぽい未熟さを抱えているということでしょう。大人、成人を定義するなら、最初にも述べましたように、自由な決断の中で自分に責任を持つ人間ということであり、最も真性な意味で、自己責任のとれる人間ということでしょう。これはキリスト教を土台としたヨーロッパ社会が生み出した人間の基本的な考え方でしょうが、キリスト教は他方で、人間の最終的な在り方を「神の子」としてこの地を継ぐものと規定していることにも注目すべきであるように思います。その意味で、子どもと我々が対等であるのは、幼子が潜在的には我々大人と対等であるからというのではなく、「我々も、子どもも父なる神の前で、等しく子である」からというところに最終的な根拠があるように思います。

私たちは確かにこの世界の中で、自らの為したことに責任を負いうる成熟した大人にならねばなりません。しかしそれが本来にできるのは、我々が根本において、神の前で、真の子供であることができるからではないかと思えます。心の奥底で、徹底して自らの弱さと依存性を自覚し、告白し、祈りうる場所を持たない、いわゆる大人というのは、シュヴァイツァーが印象深く指摘したように、意外と脆く、危うい存在ではないかと思えます。ボンヘッファーが「神の前で、神なしに生きる」と謎めいた言葉で言った時の「神の前で」というのは、この自分の弱さと

依存性の自覚の生じるところと一つであるように思えます。私たちが、新しいこれまでになかったものに自分が晒され、おろおろ戸惑い、不安の中で覚束ない歩みをしていかなければならないことを気づかされ、その弱さの自覚の中で、そのような弱い自分であつてよいのだとの大いなる肯定を受ける場所、それが「神の前で」ということだと思えます。そのような、子供でよいのだとの肯定のもとで、共にある隣人の存在を発見し、暗がりの中を、まさしく子供として歩み出すということ、この「神の前で」、というのには一つに起こることではないかと思えます。私は、人間に本質的な弱さと依存性と言いましたが、これは、苦しい時の神頼みをする弱さとは同じではありません。のど元過ぎれば熱さを忘れる式の苦しみは、本当の苦しみでも弱さでもありません。神の前での弱さと依存性の自覚とは、神の前ですますます明瞭になる依存性であり、その弱さを弱さとしてさらけ出せるものです。

### 神の前で、神なしに生きる

獄中で、成人した世界の中を、神なしに神の前で生きる、と語ったボンヘッファーは、その十年ほど前に書いた『行為と存在』の結論において、人間の究極の在り方を「子供」として規定しました。

「自己分裂に苦悩する意識は、キリストを仰ぐことにおいて、喜ばしい良心、信頼、勇気を見出す。従僕は、自由になる。異郷と悲慘の中で大人に成った者は、故郷で子供になる。故郷とはキリストの共同体である、それはいつも来るべき将来であり、信仰において現在するものである。というのも我々は、将来の子供なのであるから」(D. Bonhoeffer, *Akt und Sein*, München 1956, S. 139. 参照邦訳『行為と存在』、ボンヘッファー選集Ⅱ、

「異郷と悲慘の中で大人に成った者」とは、我々の現実の姿です。シュヴァイツァーが描いたように、我々は、嵐の中にあるこの現実の世界の中で大人になるために、多くの魂の食糧と水を棄てて、軽くなつて切り抜けようとしています。まさに疲れ切つているとも言えます。そのような大人が、故郷で子供になるのだと言います。故郷とは、子供のようであることを神の国に入る条件としたキリストを囲んだ、共同体であると言います。しかもこれは現在現実存在するキリスト教会と一つではなく、どこまでも将来のものであり、我々は、将来において子供とされるのだと言います。驚いたことにボンヘッファーは、我々はこれから将来において子供になるのだと言っています。

我々はこの世界の中に在つて、自らと世界に対して責任を持つ大人でなければなりません。しかしそれと同時に我々は、常に新しいものに晒され、戸惑わざるをえない弱さと依存性を抱えた存在であることを思われます。そして、この弱い自分であることを、自分一人で引き受けねばなりません。しかし、この引き受けを率直に跪ひざまずいて為してゆくこと、その中に深い慰めと励ましとがあることを少しづつ明らかにされてゆくこと、そのような場に立つということが、ボンヘッファーが言う、「神の前で、神無しに生きる」ということではないかと思ひます。ボンヘッファーが「神の前で、神なしに生きる」と言つたのは、大人であることと子供であることという、この二つの課題の前に自分が立つていたことを彼がはつきりと自覚していたからではないかと思ひます。我々に求められているのも、責任を問われている大人として生きることと、新しい未来に晒されて、自らの弱さと依存性を自覚して、他者

大人であること、子供であること

との共同の生を生きるという、二つのいわば反対のことを同時に為してゆくことではないかと思います。

(二〇一〇年十月二十七日、聖学院大学創立記念講演会)